「声」を考える――

一貫教育から高等教育における実践と新しい教育モデルの提示

横山 千晶（教養研究センター所長）

● テーマ

論理的思考力の基礎となる感性や身体性を座学中心の教育現場に取り入れ、一貫教育から高等教育にまでいたるカリキュラム・モデルを提供することを目標に、さまざまな研究を土台にした実践を展開することがテーマです。

● 成　果

普段は教育の中であまり省みられない「身体性」に焦点を当てた授業を、一貫校と大学とが意見を交換しながら実施するという新しい試みの中で、それぞれの学生の知的好奇心を「開いた」ことが大きな成果です。授業終了後のアンケートからも、座学に偏りがちな知の伝達を、時間をかけて身体を通して行うことの効果を、学生が実感していることがわかりました。同時にアンケートから読み取れるのは、計り知れない感動です。この「感動体験」を通して想像力と創造力が確実に伸びたことも重要な成果です。

● 実施状況

３つのプロジェクトを展開しました。ひとつ目は志木高等学校に学ぶ二年生のクラスを対象とした「『能』と『声』の授業」。ここでは能楽師を講師にお迎えして能の授業を行い、発表会を開催しました。「大学教養教育における歴史と文学」のプロジェクトでは、文学作品を体感する実験授業を夏休みに開催しました。３つ目のプロジェクト「大学教養教育における音楽実践」では、講義に併せて声と楽器演奏の実践を取り入れた授業を展開し、成果を協生館藤原洋記念ホールにて披露しました。

● 展　望

これからの展望は３つに集約されます。

１．体感型の授業をどうモデル化してカリキュラムの中に体系的に組み込んでいくか。

２．国語、文学、音楽や体育以外の科目にどのように身体性を応用していくか。

３．専門家とのコラボレーションを教育現場でいかに強めていくか。

これらの３つを新たな目標とすることにより、慶應義塾発の知と教育の最前線が築かれることでしょう。